

凱旋する日本の技と美
オールドノリタケ
Nippon Porcelain



Nippon Noritake Collectors Club

Old Noritake



凱旋する日本の技と美

オールドノリタケ

明治・大正時代、アメリカでヨーロッパの高級陶磁器としのぎを削りつつ、

日本人の高い技術と感性で作りに出してきた品質と美。

一世紀の歴史を経て凱旋し、私たちの目と心に感動をもって迎えられています。

オールドノリタケの魅力は作品の美しさや技術の素晴らしさだけでなく、

明治時代に国を思い、立ち上がった男たちの苦難と努力の歴史にあります。

遅れた日本の技術力をもって、進んだヨーロッパの高級陶磁器に戦いを挑み、

研究を重ねて作り上げた日本の技術と感性の表現、

商売の仕方・生き方が凝縮されているところにこそ見どころがあるのです。



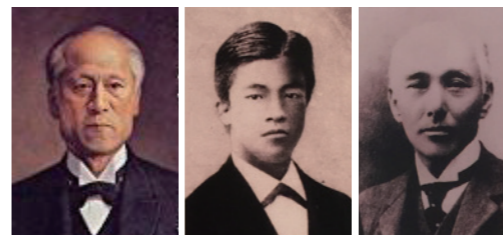
Old Noritake



Nippon Noritake Collectors Club

成り立ちと歴史

日本初の貿易商社を設立して



森村市左衛門 森村 豊 大蔵孫兵衛

明治初頭、欧米との不平等な貿易に疲弊する日本経済を憂えた、武具商・森村市左衛門は福沢諭吉の示唆によって外貨獲得を目的に森村組を創設。

ニューヨークに日本初となる貿易商社「森村ブラザーズ」を設立し、雑貨や陶磁器などの輸出を始めます。輸出を開始した当初こそジャポニズムの風潮もあり、人気のあった日本の陶磁器はやがて飽きられてきます。

当時、ヨーロッパではビクトリア王朝風の優雅で華麗なデザイン様式が人気を得、アメリカ市場でもそのようなデザインが中心になっていました。

森村組はアメリカ市場の要求に応えるため、ビクトリア朝風のデザインに取り組みました。常に市場の動向を取り入れたデザインに取り組みつつ研究を重ねます。そして作り出された日本独自の西洋陶磁器は工業的にも優れ、日本の伝統的な感性と技術が融合した芸術品として高い人気を博しました。

そして一世紀を経た今、「オールドノリタケ」と呼ばれ、世界中のコレクターに愛されているのです。

ヨーロッパにおける陶磁器の発展と森村組の取り組み



1600年代初頭、伊万里焼を生み出した日本は、東インド会社によるオランダ貿易により、ヨーロッパの王族・貴族に愛される優れた陶磁器を作り続けていました。

しかしヨーロッパでも、伊万里焼に触発された各地の王族・貴族がお庭窯として、独自の白磁器を生み出してきました。

- ◆ドイツ：マイセン窯
- ◆フランス：セブル窯
- ◆フランス：リモージュ窯
- ◆イタリア：ジノリ窯
- ◆イギリス：ウエッジウッド社
- ◆デンマーク：ロイヤルコペンハーゲン工房
- ◆イギリス：ミントン社

などヨーロッパ各地に白磁陶磁器メーカーが設立され、多くの王族・貴族を始め上流階級の嗜好に合わせた、多彩で華麗なデザインが次々に開発されていました。

ところが鎖国をしていた日本の初期の輸出陶磁器は、初期伊万里に見られる灰色味を帯びた生地に九谷風百老人や、武家侍、南画風景などのオリエンタリズムや純日本風作品がほとんどでした。技法も玉子茶ぼかし、金盛り、金唐子など古来の画工の工夫による陶磁器を制作していました。ヨーロッパの陶磁器メーカーがその技術やデザインにしを削り、斬新な製品を開発している中、純日本風陶磁器の図柄は時代遅れになっていきます。

そんな時期にアメリカは建国から百年、経済的発展とともにヨーロッパからの絢爛豪華で華麗な陶磁器を欲するようになっていました。アメリカで営業を展開していく森村組にとって、欧米人の趣味・嗜好にあったデザインを取り入れた洋風デザインを工夫しなければ販路は拡大できなくなっていました。

そして森村市左衛門は日本陶磁器を西洋風デザインに変革することを決断します。明治26年のシカゴ万国博を視察し、世界の動向を見た森村は、陶磁器の見本をはじめ、絵具・絵筆などを買って帰り、日本各地の森村専属工房にて試作を重ね、独自の西洋風のデザインを作り出しました。洋画を知らず日本画しか経験のない当時の絵師たちは当初は反発しましたが、森村らの熱意に動かされ協力することになります。

このことが日本の技術と洋風デザインの融合を生み出し、その後の発展の礎となったと言えます。

オールドノリタケのデザイン ~時代と技術と作品デザインの変遷~

▶ 国際色豊でタイムリー

森村ブラザーズの初代デザイナー和気松太郎は日米を十数回往復し、アメリカの最新の流行を日本の工房に伝えることに務めました。和気松太郎は週末は公園に出かけ、復活祭やクリスマスなどには着飾った人が集まるニューヨーク五番街の角に立ち一日中観察しました。女性の帽子や洋服から流行をいち早くとらえ、そのデザインを陶磁器に写しこむ画帖を作り、日本に送り込んだのです。

ビクトリア朝風からベル・エポック、アール・ヌーヴォー、そしてアール・デコへと、時代の最先端のデザインを採用し続けました。国際色豊で伝統的デザインとの融合、洗練された芸術美。その作りだされた陶磁器たちは世界中のコレクターを魅了し愛されました。

画帖は、ニューヨークから大陸横断鉄道に乗せ、さらに船で横浜まで運ぶため膨大な時間を掛けて送られました。さらに生産に長時間を掛けると流行に後れてしまうため、わずかな時間で陶磁器を完成させ出荷するシステムを作り、時代の流れを逃さない事業を成し遂げました。



デザインの変遷

クラシック



欧米のユーザーの嗜好が西欧の王朝風の絢爛豪華な陶磁器にあることを掴み、デザインの大転換を図りました。初期のオールドノリタケの作品です。

ビクトリア王朝風の華麗なフォルムにコバルトや金をふんだんに使い、盛り上げ技法やくさらし技法(エッチング)など独自のデザインが数多く開発され、品の良い豪華さを醸し出しています。

主に花瓶や飾り壺、ティーセット、喫煙具や化粧具類などのファンシーウエア(嗜好製品類)を中心に、非常に多くの種類の製品が作られました。その美しさがオールドノリタケの魅力を確認するものになっています。

アール・ヌーヴォー



明治33年(1900)のパリ万博を境に爆発的な流行となった芸術様式です。それまでのアカデミックな格式張った芸術から飛び出し、自由な素材、モチーフを使い、さまざまな分野に大胆な表現を可能にしていきました。

建築ではバルセロナのサグラダファミリアやパリの地下鉄の入り口などが有名です。工芸品ではエミール・ガレのガラス工芸などがあります。

アート分野では草花や昆虫・動物などがモチーフになることが多く、オールドノリタケの図案にもよく使われています。パステル調のタッチで流れるような曲線が特徴です。

アール・デコ



第一次世界大戦が始まると、装飾性の高いアール・ヌーヴォーから、キュビズムや古代エジプト、アステカ文化の装飾、さらに日本や中国など古今東西のデザインの影響を受け、幾何学模様や原色による対比表現などに特徴のあるアール・デコへと流行が移ります。より低コストで大量生産とデザインの調和が得られ大正4年(1925)、パリ国際装飾美術博覧会(別名アール・デコ博)で花開きます。大正期のオールドノリタケはこのデザインを取り入れ、モールド技法を取り入れた立体的な製品にラスター彩を施した製品で非常に高い評価を得ました。

整形技法

オールドノリタケでは様々な整形技法が用いられていますが、単独で使われるのではなく、ひとつの作品の中にたくさんの技法が組み合わせられて作られています。

盛り上げ



盛り上げとは、陶磁器の表面に粘土等で盛り上げ、立体的な装飾をする技法であり、オールドノリタケの最も知られている技法です。欧米でも「MORIAGE」と呼ばれて親しまれています。

▶ 盛り上げには様々な技法があります

一陳盛り



この技法は一陳(イチチン)という道具を使うもので、現在も陶芸技法として使われています。一陳は江戸時代の日本画家・一陳斎(久隅守景の雅号)が考案したことから名づけられたと言われています。もともとは京友禅や加賀友禅の染糊線を描くための道具でしたが、絵の具の代わりに泥漿(粘土を水で溶いたもの)を入れて陶磁器の表面に描くことにより繊細な表現ができるようになったのです。大変美しい装飾ができるため、この技法で装飾された作品には高い評価を与えられています。

金盛り



素焼きした陶磁器に絵付けをしたり、地色を塗った上に泥漿で点や絵などを描いて焼成し、さらに金漿(金を王水で溶かしたもの)を筆や刷毛を使って塗り被せる方法です。あたたかも金で盛り上げてあるかのように豪華に見えます。

金点盛り(ビーディング)



点盛り(素焼きした陶磁器に、泥漿をイチチンで点状に盛り上げる)をして焼成した上に金漿を丹念に一つ一つ塗っていく方法です。大変細かく根気のいる作業であり、大変美しい技法です。

アクアビーディング

水色のエナメルで点盛りしたもので、あたたかも水の泡のように見え、大変珍重されている技法です。

エナメル盛り(ジュール)



主に金彩と併用される技法です。金彩や金盛りされた上に、エナメルを注射器のような道具で点状に盛り上げたもので、宝石のような美しさがあるためジュール(ジュエリー)と呼ばれています。

ウエッジウッド風



イギリス・ウエッジウッド社の代表的な製品に、粘土をカメオ状の型にはめて作った柄を張り付けて作るジャスパー法と呼ばれるものがあります。オールドノリタケ製品は、一見してジャスパー法で作られたように見えますが、型にはめるのではなく、イッチンや竹ペラ、筆などを使って盛り上げて作られています。ウエッジウッドを意識して作っていたということでしょう。

▶ その他のユニークな技法

上記のほかに「泥漿盛り上げ」「蜘蛛の巣盛り上げ」「レース盛り上げ」「ガレ風盛り上げ」など様々な盛り上げ技法があります。またさらに、盛り上げ以外のユニークな様々な技法を駆使していました。

腐らし、金腐らし(エッチング)



版画のエッチングの技法を使った方法で、森村組では「腐らし」と呼ばれていました。磁器の肌のまま残したい部分にはコールタールの紙を貼りつけてフッ化水素の溶液に漬けます。貼られていない部分は腐食して艶が無くなり、窪みようになります。そこに彩色や金彩を施すとマットな感触になり、コールタールを貼った艶のある部分とはっきりと区別できます。大変風合いがありオールドノリタケの代表的な技法として評価されています。

タピストリー(布目仕上げ)



整形直後の柔らかい生素地に麻布のような粗い目の布、または絹のような細かな布目の布を貼り付けて焼きます。焼くと布は燃えてしまい布目だけ残ります。その地肌に絵柄を描くと油彩用のキャンバスに描いたようにも見え、独特の風合いが得られます。作られた数が少ないため希少価値があります。

モールド(石膏型でレリーフを造形)



石膏で器の型を作り、油で捏ねた粘土で人物や動物などの形を盛り上げて貼りつけます。それを基に原型を作り、石膏などで使用型を作ります。その使用型に泥漿を流して生素地の器を作り、800～1100℃の高温で焼成します。それに彩色を加えると立体的なレリーフが浮かび上がります。大変手間のかかることから希少であり、高い評価を得ています。

絵付けのいろいろ

オールドノリタケの絵付けは、独自のものにヨーロッパの技法なども柔軟に取り入れて豊富なデザインを作り出しました。そのことによってさらに高い評価を受けることになりました。またそれらの絵付け技法が効果的に組み合わせられ美しい作品に仕上げられています。

ハンドペインティング(手描き)

オールドノリタケの陶磁器は、基本はすべて手描きで絵付けされています。その絵付師は、廃藩置県で免職となった各藩の絵師(日本画家)たちも多く、しっかりした技術力を持っていました。大正、昭和期には日本洋画界で名のある作家もノリタケで絵を描いていました。ただし工業製品であるため作者のサインはありません。中にはわからないように作家のサインが入っているものもあり、作家のプライドが垣間見えたりすることもあります。

ぼかし(暈し)



オールドノリタケの特徴的な絵付け技法のひとつとして、ぼかし技法がよく使われています。ぼかしは伝統的な日本画の技法であり、ヨーロッパ製品にはあまり見られない絵付け方法です。奥行きを感じさせる幽玄なイメージがあり、エキゾチックな日本の表現として人気を博しました。

コバルト(瑠璃色)



俗に言うコバルトブルーよりも少し濃く深みのある美しい青です。材料には酸化コバルトが用いられていました。製陶用としてはドイツ・マイセンの製陶所によって開発されました。フランス・セブル窯のコバルトが「王者の青」として特に有名で、ヨーロッパ王室でも愛用されていました。オールドノリタケでも高級陶磁器に多用され、金彩や金盛りとの組み合わせで大変豪華なイメージを演出しています。

金彩



王水(濃塩酸と濃硝酸を3:1の割合で混合した溶液)で金を溶かし、液状にした金液(水金)です。この金液を顔料として陶磁器の金彩を施します。オールドノリタケでは多くの陶磁器に使用され、豪華なイメージを作り出しています。

ラスター彩



オールドノリタケではアール・デコの作品に多く使われています。パール状の美しい輝きがあり、自立し始めたヨーロッパの女性たちに熱狂的に愛されました。ラスター彩は9～14世紀にイスラムの陶器に使われていましたが、その後使用されなくなっていました。アール・デコの彩色法として復活しました。ここで使われていたラスターは金属や貴金属を王水で溶解し、さらに酸化バルサムを化合させ、それを絵付けし易くするために松脂(ロジン)を添加して作られました。

転写絵付け



オールドノリタケはハンドプリント(手描き)を基本としていましたが、日本の絵師たちにはヨーロッパの王女や僧侶などの肖像画を描くことができませんでした。そこでヨーロッパですでに使われていた転写紙を使用しました。当時転写紙は大変高価な上、精密な技術を必要としていました。オールドノリタケでは転写されたものに、さらに様々な技法を用いて美しい陶磁器に仕上げられ大変価値の高い作品になっています。転写紙は台紙に陶磁器用絵の具を用いて絵柄を印刷したもので、写し絵のように陶磁器の地肌に絵柄を写します。そのため、ヨーロッパにも同じ絵柄の陶磁器がたくさんあります。

ポर्टレート(肖像画)



転写絵付けにより人物画を絵付けした製品です。当時ヨーロッパで人気のあった婦人や僧侶などがモデルとなっていました。プロシアの女王・マリー・ルイーゼやレカミエなどの婦人像がよく使われました。

ダミ

日本画の濃絵(だみえ)からきた名前ようですが、磁器の表面を模様や地色で塗りつぶす方法です。金ダミや呉須ダミがあります。

マーブル(スプレー吹きぼかし 大理石風)

スプレーで数色の色を使って大理石の柄をつけ、その上に彩色する方法です。アメリカでマーブルと呼ばれ親しまれています。

漆蒔き

上絵の地色をむらなく塗るため、最初に筆で漆を塗り、さらにタンポンなどでむらなく丁寧に漆を塗りつけます。その上に粉末絵の具を振りかけて彩色します。深みのある美しい色地肌が得られます。

効果的に組み合わせられた技法

これまでみて来た以外にも様々な技法が工夫され、各技法が効果的に組み合わせられることによってオールドノリタケの魅力を一層高いものになっています。

ディナーセットへの挑戦

様々な優れた技法と繊細で巧みな技術で制作された製品は高い評価を得、売り上げを伸ばしていました。しかし明治27年(1894)、需要の多いテーブルウェア(洋食器)の生産に取り組みます。ところが、それまでのファンシーウェア(装飾磁器)はやや灰色がかった素地であったため、純白であることを求められるディナーセットには適しません。純白の硬質磁器の開発に取り組みますが困難を極めます。ヨーロッパ各地の工場を回って助言を受けながら研究を重ね、明治36年(1903)白色硬質磁器の素地を完成させ、純白な陶磁器の生産に成功しました。しかし、ディナーセットの中心となる直径25cmのディナー皿を作るためにはさらに10年の研究が必要で、成功は大正3年(1914)まで待たなければなりませんでした。

ボーンチャイナ(軟質磁器)

ボーンチャイナ(骨灰磁器)はリン酸カルシウムを30%以上含む、乳白色のなめらかな焼き物で、18世紀にロンドンで発明されました。当初中国の有名な粘土の生産地・高嶺(カオリン)で生産される粘土を輸入していましたが、入手が困難になったときにリン酸カルシウムを多く含む牛の骨灰を粘土に混ぜて使ったことから「ボーンチャイナ」の名前が付けられました。ただし、現在では牛の骨ではなく、直接リン酸カルシウムが用いられています。ボーンチャイナは一次焼成を高温で行うため、二次焼成で変形することがなく、高温では変色しやすい釉薬を使うことができます。そのため、通常の白磁器よりも多彩で繊細な模様を付けることが可能です。また、一般の磁器よりも素地が薄くても強度があり、透光性もあります。昭和7年(1932)ノリタケはボーンチャイナの開発を初めて成功しました。そしてイギリスの独壇場だったアメリカにおけるボーンチャイナ市場へ投入し、大反響を得ます。太平洋戦争の深刻化により陶磁器の生産が停止されたときも、技術保存のために生産を続けることが許されていました。

画帖(デザインノート)



森村ブラザーズのデザイナーはアメリカの最新の流行を日本の工房に伝えることに務めました。流行を取り入れたデザインを陶磁器に写し込む画帖を作り日本に送り込んだのです。日本の生産工房では、その画帖を「米国神聖」と呼び、そのデザインを確実に製品化することに努めました。その画帖は戦争で工場が火災に逢った時に焼けたり汚損したりして失われたものも多いのですが、丁寧に清掃復元し、今も大切に保管されています。

裏印<森村組からノリタケへの変遷の中で使われた裏印の一例>

陶磁器には多くの場合裏印が押されています。オールドノリタケにも押されていますが、そのマークには輸出先や時代によって様々な変遷があります。また、輸出を始めたばかりのころには裏印の押されていないものもありました。

当初は専属絵付け工場の窯元名や森村組のイニシャルである“M”のマークが付けられていました。また明治23年(1890)、アメリカの関税法で輸入品に原産国名を表示することが義務付けられた折り、ノリタケは JAPAN とすべきところを NIPPON と表記してしまいました。大正7年(1918)に指摘されて JAPAN に変更されるまで NIPPON が使われていました。また、NORITAKE の表示は明治41年(1908)から使われるようになりました。



日本陶器合名会社創立とオールドノリタケ



モリムラブラザーズ(ニューヨーク)

日本陶器合名会社(愛知県愛知郡鷹羽村大字則武)

ニューヨークのモリムラブラザーズの発展に合わせ、国内の森村組も生産効率を高めていきました。明治37年(1904)愛知県愛知郡鷹羽村大字則武字向510(現在は名古屋市西区則武新町1丁目1番地)の地に一環生産工場をつくり、新会社・日本陶器合名会社が誕生しました。その地名がノリタケのブランドネームとなり社名となり現ノリタケカンパニーリミテッドとなったのです。現在オールドノリタケの呼称で親しまれている陶磁器は森村組および日本陶器合名会社時代に製造され、輸出された作品を指しています。

参考 森村コンツェルン=ノリタケグループの現在

- 日本ガイシ** 明治40年(1907)ころ、水力発電への転換により、遠距離送電用高圧碍子を国産するため、芝浦製作所(現東芝)の依頼で作った碍子製造部門が独立し、現在の日本ガイシ株式会社となります。
- TOTO** 輸入に頼っていた衛生陶器を大正3年、洋風衛生陶器の国産第一号水洗トイレ用の大・小便器を完成させます。大正5年日本陶器から分離独立し、東洋陶器株式会社(現TOTO株式会社)となります。
- 大倉陶園** イギリスのポーンチャイナ、フランスのセーブル焼、イタリアのジノリ焼以上の世界的美術陶芸磁器を制作するために始めた事業。また陶芸家を育成することも使命の一つでした。
- LIXIL** 大正10年、機械化による陶管の量産を計画した伊奈初之丞に資金を出し設立。伊奈製陶となり、INAXに。現在はトステム・新日軽・サンウェブ・東洋エクステリアとの共同事業体としてLIXILに。
- 日本特殊陶業** 大正5年(1916)、日本碍子が国産初の点火プラグを完成させ、NG点火プラグを発売します。昭和11年(1936)独立し、日本特殊陶業株式会社となりました。

世界中にファンを持つ オールドノリタケ

INCC: International Nippon Collectors Club
(インターナショナル日本コレクターズクラブ)

オールドノリタケを愛する人々の集う世界的なファンクラブ。アメリカに本部を持ち、すでに40年近い歴史を持つ。会員同士の交流や「INCCジャーナル」や「INCCニュース」などを発行。作品についての研究や勉強会を行い、一時期出回った中国製の粗悪な模造品への注意を呼びかけるなどの活動もしている。

JNCC会長の竹内友章氏は、2007年と2014年の2度INCCプレジデントを務めた。

初版発行：2017年7月20日

編集：竹内友章、井田清、門山光

監修：竹内友章

発行：JNCC

(Japan Nippon Collectors Club (ジャパン日本コレクターズクラブ))
(INCC: の日本支部)

住所：群馬県藤岡市中島584-13